

クラッシュ・ブレイズ

ミラージュの罫

茅田砂胡

Sunako Kayata

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶(次ページ)をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

DTP 挿口
P 画 絵
ハンズ・ミケ 鈴木理華

1

人の出会いというものは理屈では計り知れないが、それにしてもこれはいささか劇的に過ぎた。

リイはその日、一人で放課後の街を歩いていた。アイクライン校からもっとも近い街はマーロンと呼ばれている。

この街を中心に、アイクライン、アルサチアン、ヴェルナル、サフノスク等、中等高等学校から専門大学までが幅広く点在している。

「ヴィッキー！ 珍しいじゃない。今日は一人？」
元気な声で話しかけてきたのはアイクライン校の高校三年生ファビエンヌ・デニングだった。

町角で偶然ばったり出くわして開口一番の台詞に、リイは小さく吹き出した。

「おれはそんなにいつもシエラと一緒にいるように見えるのか？」

「もちろんよ。だから一人でいるのが目立つんじゃない。喧嘩けんかでもしたの？」

「おれたちだつてたまには別行動を取る時もあるよ。」

——そっちはデート？」

「そうよ。——わかる？」

「わかるよ。おしゃれしてるってことくらいはね」

ファビエンヌはいつも活動的な服装をしているが、今日は何だかスカートがひらつとしていて、薄く口紅を引いて、いつもはしない髪飾りをつけている。

「そういうのも似合ってる。可愛いよ」

正直な感想を述べると、ファビエンヌは大げさに肩をすくめた。

「その顔で真面目に言われるとこっちが照れるわ。」

あなたはどつなの。ガールフレンドはいないの？」

「残念ながら。おれはあんまり女の子にはもてないみたいだからね」

ファビエンヌは呆れ返った眼でリイを見た。

相変わらず自分がいかに人目を惹く容姿であるか、少しも自覚していないらしい。

二人が立ち話をしている角の店は中学校の生徒に人気の雑貨店で、そこではちようど女子生徒が大勢買いついて来ているところだった。

何人もの少女たちが陳列窓越しに、そつとリイを窺っている。

密かな興奮と憧れを隠しきれない熱い眼差しだ。

どうして本人だけがこれに気づかないのだろうと、苦笑したファビエンヌだった。

「こつちのほうが気の毒になつてくるわね」

「何が？」

「いいのよ。あなたにはわからないことだから」

今時の子は——もうじき高校を卒業する十八歳のファビエンヌは中学に入学したばかりの少女たちをそんなふうに表示している——男の子に対してそれほど消極的ではないはずなのに、この少年の前では

なぜか後戻りしてしまふらしい。

下級生の少女たちの中にもリイに憧れているながら、声を掛けられないと嘆いている子が何人もいるのを知っていたが、それを教えてやるつもりはなかった。教えても多分、無駄だからだ。

時計を見て言った。

「じゃあね。そろそろ行かなきゃ」

「ああ。——寮長によろしく」

連邦大学の治安の良さは特筆すべきものがある。

子どもたちが安心して勉学に励めるように、またその親たちが安心して子どもを託せるようにという配慮からだ。が、入国審査の厳しさは連邦の要である中央座標にも匹敵するほどだ。

生徒の身内といえども入国する際には事前連絡が不可欠なことから、身許の怪しい人間など、とても入国できない。

よほどの例外を除いて、武器の携帯も持ち込みも

許されないし、もちろん販売することもできない。

当然、居住に関する規制もかなり厳しい。

学校周辺の街の住人は何代も前からそこに住んでいて、近所とも顔見知りという人間がほとんどだし、連帯感も強い。

いい意味での地域社会が機能しているのだ。

だからリイのような子どもでも、十代の少女でも一人で街を歩くことができる。

あまり治安のいいとは言えない国からやってきた生徒たちには特にそれが新鮮なのだろう。

週末はもちろん平日でも、学校が終わると同時に街へ飛び出していくのが常だった。

ただし、すぐに半端ではない授業内容に愕然とし、連日の宿題の量に青ざめ、そうそう遊んでばかりはられないと気を引き締めるのも常だったが……。

授業と寮生活に慣れてくると、外出できる時間とできない時間は自分で判断できるようになるもので、街は今日も大勢の生徒で賑わっていた。

中高生ばかりではない。大学生の姿も見える。

フアビエンヌを見送った後、リイは不快な視線を感じて振り返った。

自分に好意を寄せている少女の気配には鈍くても敵意には敏感なリイである。

案の定だった。二十歳前後に見える大きな男子が三人、にやにや笑いながら近づいてくる。

生徒の安全のために気を配っている大学当局には申し訳ないが、危ないのは人気のない道よりむしろ街中で、さらに言えば大人よりも生徒のほうがだった。

特にこんなふうに群れているのは厄介である。

三人は、自分たちのほうが相手よりずっと身体が大きいことに優越感を感じているのだろう。

小さなリイを頭から見下ろして言ってきた。

「おまえ、時々うちの構内に顔を出してるよな」

「うちって？」

「しらばっくれるなよ。サフノスクだ」

中学生が大学の構内に顔を出すのも連邦大学では

珍しいことではない。

飛び級で進級する生徒も大勢いるからだ。

ただ、リイがサフノスク大学を訪れるのは知人が在籍しているからで、四人はどうやらそれに対して一言あるらしい。

「在籍してるわけでもないのにな」

「ちゃんと受講するならともかく、大学は子どもの遊び場とはわけが違うんだぞ」

「俺たちみたいな真面目な学生は迷惑してるんだぜ。反省しろよな」

リイは黙っていた。

言い返すのも馬鹿馬鹿しかったからだ、それが答えに窮きまづしているように見えたらしい。

ますます嵩かさにかかって言ってきた。

「聞いているのか？ 目障りだと言ってるんだよ」

「部外者にうるちよろされると気が散るんだ」

「大学当局と交渉して立ち入り禁止の措置を取ってもらってもいいんだぞ」

小さなため息を洩もらしたリイだった。

どこにでもこういう連中はいるものだ。

年上の三人が相手でもリイは怯ひるんだりしないが、ここは街中だ。あまり思いきった手段も執とれない。

まずは冷静に言い返してみた。

「サフノスクの学生は中学生が目の前にいるだけで勉強がでなくなるのか？ それは知らなかった」

少年たちは意外そうな顔になった。

ちよつとからかって困らせてやろうとしたのに、

吹けば飛びそうな、少女のような顔だちの子どもが脅おそえるでなく、怯おそむでもなく、自分たちに正面から意見してくるとは思わなかったのだろう。

リイにはもともと、十三歳の子どもとは思えない大人びた雰囲気がある。

同年代の少女たちにはそれが自分たちを拒む壁のように感じられ、この連中のように数と力を頼みに群れたがる少年たちには生意気と映るのだろう。

生意気な少年をちよつと懲こらしめてやるつもりが

予想外の反撃を受けて、三人は表情を険しくした。

素早く周囲に眼をやった。

人通りは少なくない。だが、自分たちにそれほど注目が集まっているわけではないことを確認すると、肩を怒らせて迫ってきた。

「言ってくれるじゃないか」

「そこまで言うならつきあえよ」

人前で騒ぎを起こすのはまずいと判断する程度の頭はあるようだが、見逃すつもりもないらしい。

人気のない裏通りへ連れ込んで少し思い知らせてやろうというのだから、笑止千万である。

「どこまで行けばいいのかな？」

わざと相手を見下すような口調で言っていると、三人はあからさまに怒りと侮蔑の表情を浮かべた。

「最近の中学生は口の利き方も知らないらしい」

「連邦大学全体の恥にもなる。しつけないおさなきやいけないな」

「謝るなら今のうちだぞ」

年下の、華奢な身体つきの少年と見て侮り切っているのだから、それがまた笑える話だ。

リイもこの連中を見逃す気はなくなっていた。

ここで見逃しても恐らくまた同じことが起きる。

これ以上、自分にかまう気をなくさせる意味でも、この連中の身許は確認しておこうと思つたのだ。

「だから、どこへ連れていってくれるんだ？」

挑発するようなリイの言葉に少年たちがますます剣呑な顔つきになる。

リイに向かつて声が掛かったのはその時だった。

「モンドリアン!？」

リイはぎよつとして振り返った。

自分の名前ではないが、その名前にもその声にもいやというほど覚えがあつたからだ。

背の高い黒髪の少年が驚きと喜びを顔に浮かべて、まっすぐこちらへ近づいてくる。

この時ばかりは我が眼を疑つたリイだった。

惑星ツァイスの高級学校の名門として知られる

全寮制男子校の聖トマス学園、その最上級生にして
監督生でもあるザック・ダグラスだった。

啞然としながらリイは訊いた。

「なんでここにいます？」

「体験留学だよ。来季からここに通う予定なんだ。

モンドリアンこそどうしてここに？」

「あーっと、ちよつと待って」

珍しく焦って狼狽したリイだった。今ここでその
名前を連呼されるのは非常にありがたくない。

三人のほうも邪魔が入ったことに不快感を示して、
ダグラスに突っ掛かった。

「邪魔するなよ。俺たちはこいつに用があるんだ」

これにはダグラスが訝しげな顔になった。

生徒を束ねる監督生を勤めているくらいだから、
彼は人並み以上の勇氣も責任感も持っている。

相手が三人でも大人しく引き下がるはずもなく、
厳しい眼で少年たちを見返した。

「そうはいかないな。きみたちの様子はどう見ても

穏やかとは言えない。この子に何の用がある？」

三人は歪んだ笑みを浮かべた。

「穏やかじゃないって？」

「そつちこそおかしなことを言うじゃないか」

「俺たちはただ、こいつと話してただけだぜ」

そんな言い分にダグラスが説得されるはずもなく、
胡亂な眼で三人を見つめた。

「きみたちはサノーチェか？」

サノーチェはサフノスク大学生の総称である。

「だったら何だ？」

「ほくもだ。社会学の短期留學生だが、きみたちの
学部と名前を聞かせてもらおう」

三人はちよつと面食らったものの、前にも増して
嘲りの表情で言い返した。

「留學生が在校生に意見する気か？」

引っこんでろと暗に言っただけだが、ダグラスは
真顔で領いた。

「そうだ。意見せざるをえない。短期留學とは言え、

ほくは連邦大学の一員として恥ずかしくないように振る舞うことを宣誓した。在校生が話してくれたが、連邦大学のどの学校でも、正式に入学すると同様の宣誓をするのだと聞いた。その誓いに背いたものは相應の処分を受けることになるのだと。きみたちがサノーチェならもちろん同じ宣誓をしているはずだ。この子と普通に話をしていただけなら学部と名前を言えないはずはないだろう」

堂々たるものである。

母校を離れても監督生気質は変わらないらしい。

連邦大学は生徒の非行や素行不良を見逃したりは決してしないところだ。何か問題を起せば迅速に対応するし、程度によっては放校処分という厳しい措置もためらわない。

自分の行動には責任を取るようというわけだ。

生徒もそれを知っているから学校側の眼を盗んで害のない悪戯をこっそり楽しむくらいはするものの、大勢で下級生をいじめたりは決してしない。

連邦大学は時代の社会を担う指導者や知的階級を育成しているのであり、弱者をいじめような者はその地位に伴う責任能力がないと判断されるからだ。三人ともそれは承知している。

ダグラスの言い分に理があるのは明らかなので、明らかに氣勢を削がれた顔になった。

どうする？ と、無言で相談している。

リイはこの間、ずっとはらはらしどおしだったが、さらにまずいことになった。

フォンダム寮長のハンス・スタンセンがその場に加わってきたのである。

「ヴィッキー？ どうかしたのか」

よりもよってこんな時に――。

なぜ狙ったように顔を出すんだと恨めしく思ったリイの心境など、ハンスはもちろん知る由もない。

ハンスとしては同じ寮のリイが大きな少年たちに囲まれているのを見逃せなかったのだろう。

それはわかる、よくわかるのだが、いったいこの

状況をどう収めろというのか、リイがほとんど頭を抱えている間に三人は完全に意気消沈したらしい。

こんな道端で口論を続けていればいやでも人目を集めることになってしまう。

「忠告を忘れるなよ」

そんな捨て台詞を残して去って行ったのである。

少年たちを見送ったハンスは首を傾げて、リイに話しかけた。

「何だったんだ、今の？」

「こっちが訊きたい。それより……」

何とかハンスをこの場から遠ざけようとしたのに、ハンスは初めて見る顔のダグラスに話しかけていた。

「きみもアイクラインの生徒なのかい？」

今度はダグラスが不思議そうな顔になった。

ダグラスの考えではリイは転校してきたばかりで、まだ新しい学校には馴染んでいないはずだからだ。

しかし、リイに対するハンスの態度はつきあいが浅いようには見えない。ずいぶん親しげである。

そうした疑問をダグラスが口にする前に、リイは慌てて割って入った。

「寮長、そんなことより女の子を待たせていいのか。ファビエンヌはもうずいぶん先に行ったぞ」

「えっ、ほんとに？」

効果てきめんである。

ハンスは挨拶もそこそこに切りあげ、慌ただしく待ちあわせ場所に向かっていた。

二人きりになると、ダグラスはリイを見下ろして、ちよつと照れくさそうに笑いかけてきた。

「ここできみに会えるとは思わなかった」

「おれもだ」

注意深く答えながらも、リイの頭は目まぐるしく回転していた。

何が最善かを素早く考えていたのである。

本来なら相手にしないのが一番いい。

このまま走って逃げてしまうことも一瞬、本気で考えたが、それは事態の悪化を招くだけだとすぐに

思い直した。

この界限にはリイの顔を知っている人間が山ほどいるのである。

それだけでなくとも自分の容姿は目立つものらしいし、ダグラスは真面目な性格で行動力もある。

偶然とはいえ、アイクラインの名を耳にした以上、素直に諦めるはずがない。何が何でもリイの居所を突き止めようとするだろうし、このマーションでならそれは別段難しいことではない。

ここで逃げたら、ダグラスがアイクライン校まで乗りこんでくる事態となるのは恐らく間違いない。

現にダグラスはここでリイと別れる気はさらさらないようで、躊躇いながらも訊いてきた。

「モンドリアンは？ あらためて転入したのか」

リイは観念して天を仰いだのである。

こうなつてはもう仕方がない。

下手に取り繕うのは逆効果だ。それより正面から当たったほうがいいと腹をくくつて言った。

「ダグラス。それはおれの名前じゃないんだ」

「えっ？」

「モンドリアンっていうのは偽名なんだよ」

「何を言ってるんだ？」

ダグラスは驚いて言い返してきた。

「短い間でも、きみは聖トマスの生徒だったんだぞ。

偽名でツァイスの高級学校に入れるわけがない」

「もつともな正論だけど、こっちが本当だ。それはおれの名前じゃない。——ついでに言うと、おれが

聖トマスに転入した事実もない」

ありありと不審な顔になったダグラスに、リイは困つたように笑いかけたのである。

「そういうことで納得してもらえないかな？」

「無理だ」

ダグラスはきつぱり言った。

当然と言えば当然の答えだった。

「きみの口からはつきり説明してもらわなければ、納得なんかできるわけがない」

「そう言われてもダグラスが納得するように話せる自信がないんだ」

今度は呆れ返った顔になったダグラスだった。

そんなふざけた言い分が通ると思つていいのかと、無言で迫ってくる。

ダグラスは背が高く、整った顔立ちで、険のある目つきをしている。そんな少年が小柄なリイを睨みつけているのだから、知らない人が見たらそれこそいじめているように見えたかもしれないが、リイは「しょうがない」とでも言いたそうに肩をすくめて、微笑を含んだ眼でダグラスを見上げている。

こんな睨めっこでは勝負は決まっている。

負けまいと踏ん張ったダグラスだったが、思わず眼を逸らしてしまい、その自分の行動に舌打ちして決意も新たに視線を戻した。

「モンドリアンが偽名なら、どう呼べばいい?」

「ヴィッキーだ。ヴィッキー・ヴァレンタイン」

「それが本名なのか?」

「まあね」

本当はもつと長つたらしい名前が別にあるのだが、それを言い始めたらきりが無い。

「アイクラインというのはきみの学校か?」

「ああ。その中等部一年だよ」

リイが淀みなく答えたことでダグラスはひとまず不審を解いたらしい。

躊躇いがちに申し出てきた。

「今日は時間がないんだ。よかつたら、明日にでもまた会つて話せないか?」

「いいよ。だけど、あまり人の多くない場所で」

リイは頷いて、付け加えた。

「特にこの近くでないほうが嬉しいな」

「じゃあ、サフノスクの近くまで来られるか?」

「もちろん」

ダグラスは少し考えて言った。

「構内の一番南側に一般に開放されている図書館があつて、その前のメルヴィル通りをまっすぐ行くと

ボーデインの交差点がある。右へ曲がってサマーズ通りをしばらく進むと、左手にアレクサ通りという細い道があるんだ。その37番地まで来られるか？」

「たぶん。行けばわかると思う」

「じゃあ、明日の——そうだな。午後四時に」

「わかった」

アレクサ通りは気をつけていなければ通り過ぎてしまうような路地だった。

両脇に建ち並ぶのは年月を経た集合住宅ばかりだ。

この辺りはマーロンの中でも旧市街に当たるので、少なく見積もっても百年の歴史はあるだろう。

その壁の間を縫うように細い道が延びている。

ダグラスが指定した37番地も、一見したところは当たり前前の集合住宅に見えた。

普通に人が住んでいる民家ということだ。

扉は桎板かしとに鉄枠てつわくを嵌めこんだ古めかしいもので、当然鍵が掛かっている。

こういう集合住宅では扉の横に住人の標札が並び、それに伴った暗証番号式の端末があるのが普通だが、この扉の横には呼び鈴が一つしかない。

ここでもいいのかと思いつつながら呼び鈴を鳴らすと、壮年の男の声が応じてきた。

「どなたかな？」

「ヴィッキー・ヴァレンタイン。ここへ来るように、ダグラスに言われたんだけど……」

答えはなかったが、誰かがどこかで自分をじっと見ていることにリイは気づいていた。

鍵が解除される音がした。

入れという意味に解釈して重そうな扉を押すと、簡単に開いた。

扉をくぐったところは狭い通路になっていた。

窓が一つもなく、昼間だというのにうす暗い。

しかし、通路の先を見れば建物の中にも拘わらず、陽の光が燦々さんざんと降りそそいでいるのが見える。

通路を抜けると、そこには豊かな緑がいっぱいに

広がっていた。

芝生や花壇かだんの類たぐいではない。

庭と言つてしまふには怖ろしく見晴らしが悪く、

奥がまったく見通せない。

見上げるような背の高い木がふんだんに植えられ、

地面は花をつけた灌木かんぼくや茂みやらでびっしり覆おほわれ、

その間を縫うように小道がつくられている。

呆あつけ気にとられた。

林と言ふには少し小さめだが、これはもう立派な

木立と言つていい。

もちろん自然の木立ではない。そう見せてあるが、

明らかに人の手が入っている。

まさかこんなものが建物の中に——それも民家の

中にあるとは思つてもみなかつた。

木立の奥から男が現れた。

がっしりした体つきの五十年輩の男で、どうやら

さつきの声の主らしい。

リイに向かつて、ついて来いという仕種しぐさをする。

大人しくその後に従つて歩き始めると、ちらほら

人影が見えた。小枝や灌木が邪魔してはつきりとは

確認できなかつたが、一人で本を読んでいる学生の

ような若者がいるかと思えば、近所の住人に見える

老夫婦が楽しげに談笑している。

それでいながら、その人たちと正面から出くわす

ことは一度もなかつた。

不思議なつくりだつた。

普通の庭園なら、第一にもつと見晴らしがいい。

たとえ高木を多用した庭であつてもだ。遠くまで

視線が届くし、好きなどころへ歩いていけるように

ちゃんと道が設けられているはずだが、ここは違う。

人ひとりがやつと通れる程度の細い小道が茂みの

中に網の目のようにはりめぐらされている。

結果、他の人とはなるべく顔を合わせないように

うまくできてゐるわけだ。

男がリイを案内したのは、まだ若い木の下だつた。

周囲は灌木と下草に囲まれているが、足下だけは

自然に踏み固められて地面が見えている。

そこに丸太を割ってつくったような素朴な机と、切株を加工した武骨な椅子が並んでいる。

似たようなものなら街の公園でもよく見掛けるがこれは本物の材木だった。

いい具合に色褪せて木立の一部と化している。

ただし、ダグラスの姿は見当たらない。

ここで待てという意味だろうと思つて切株に腰を下ろすと、今まで黙っていた男が言った。

「ご注文は？」

これにはびっくりした。

リイは思わず年相応の口調で問い返していた。

「ここ、お店なの？」

眼を丸くするリイを見下ろして、男は微笑した。

「ま、そんなようなもんだ。こんなに若くて可愛いお客さんは珍しいがね。——ココアでいいかね」

「それはちよつと。甘味抜きのお茶か珈琲を」

男が離れていった後、リイはつくづく感心して、

周囲を確認した。

頭上には小枝が広がり、木漏れ日が差ししている。眼を凝らして彼方を見ると、高い小枝に遮られて

はつきりしないが、四隅に間違いなく壁がある。

ということは、ここは中庭なのだ。

集合住宅に中庭があること自体は珍しくないが、これほどの規模の、しかもこんなに樹木の密集してつくられたものは滅多にないはずである。

しばらく待っていると、飲物が届けられた。

特大のてんとう虫のような、荒地用の自動機械が静かな作動音とともにやってきて止まる。

旧型らしく、止まったらそのまま動かない。

リイが蓋を開けてみると、中には大きなポットと茶碗が入っていた。

香りからすると中味はハーブティーである。

このお茶は冷めてもおいしく呑める。

しかもこれだけの量だ。長居してもかまわないというこららしい。

自分でお茶を注ぎながら、おもしろい商売をする店もあるものだといは思つた。

通りには何も看板は出ていなかったし、呼び鈴を鳴らすまで扉に鍵が掛かっていたのも間違いない。

あの様子では他に入り口があるとは思えないから、客であつても自由にこの中には入れないことになる。

他人事ながら心配になつてきた。

(そんなことで儲かるんだらうか……?)

約束の時間になつてもダグラスは現れなかつたが、退屈はしなかつた。

すぐそこにビジネス街のサマーズ通りがあるとは信じられないくらい穏やかな空気が流れている。

陽射しは暖かく、木の幹をゆつくりと虫が這い、他の客の話し声が木立の奥から聞こえてくる。

鳥の囀りのようで、それすら耳に心地よかつた。

普通の十三歳の少年ならとても一人でじつとしていられなかつただらうが、こうした時間はリイには好ましいものだった。

人工的につくられた箱庭のような小さな空間でも、適度な静寂と適度な生きものの活気がある。

土の匂いや木の感触、風の香りが楽しかつた。

その頃、シエラはルウと会つていた。

サフノスクの学食でシエラはオレンジジュースを、ルウは今日のデザートのあるだけ並べている。

「面倒なことになつたねえ……」

「はい」

硬い顔で頷いたシエラは、ずっと気になつていた疑問を尋ねてみた。

「あの人は偶然にもほどがあると言つていましたが、ルウ。これは本当に偶然でしょうか？」

「そう言いたくなる気持ちはわかるけど、偶然だと思ふよ。ツァイスの高級学校は高校課程までだから、連邦大学に進学する人も少なくないんだけど……」

甘いものの大好きな黒い天使が、今はできたのフォンダンショコラにも気を引かれない様子である。

「よりもよって、何もサフノスクに来なくなつてよさそうなものなのにね……」

一口に連邦大学といつても、その規模は惑星一つ丸ごとを指すのだ。

こうなると同じ連邦大学の学生だから交友があるだろうという理屈は間違つても通じない。

同じ学校に籍を置いていても、選択課目が違えば卒業するまで顔を合わさないことも珍しくないのだ。

入学前の知人と偶然にも街中で出くわすとなると、天文学的に低い確率のはずである。

「それで、何かわかりましたか？」

シエラの質問にルウは首を振つた。

「寮の知り合いに社会学を専攻している子がいてね。それとなく訊いてみたけど、はつきりわかつたのはダグラスくんの出身地だけ。惑星ダルチエフ」

勤勉な中学生のシエラはその名前を知っていた。

「社会主義体制の星ですね？」

「うん。ダグラスくんは富裕層の出身なんだろうね。」

でなきヤツアイスの高級学校には通えないよ」

「父親はかなり社会的地位があるということですね。家族構成は？」

「そこまでは無理。ダグラスくんは一週間前に留学してきたばかりで、今は勉強に一生懸命らしいから。事務局に問いあわせても学生の個人情報は極意事項扱いで、同じサノーチエであっても閲覧はできない。アイクラインも同じ仕組みになつてはるはずだよ」

「そうですか……」

「結局、誰かのことを知ろうと思つたら、その人と親しくなつて本人に訊いてみるのが手つとり早い。

あの子、今ダグラスくんと会つてるんでしょ？」

「ええ」

シエラは苦い顔だつた。

本当はリイ一人で行かせたくはなかつたのだ。

あの人のことだ。相手の情報を仕入れるより先に相手を怒らせてしまふことが多分にありうる。

ルウも同じことを考えていたらしい。

二杯目の紅茶にミルクを入れて、いやに念入りにかきまわしながら、独り言のように言ったものだ。

「ぼくにとつての最悪はダグラスくんが大騒ぎして、聖トマスに通報することだ。以前うちの生徒だったモンドリアンの身許調査はどんな手順でやったのか——本当にちゃんと確認したのかってね」

「ですけど、どんな記録を調べても今のあの人にはたどりつけないはずでしょう？」

「もちろん。そんな手ぬかりはしてない。学校側も真剣には受け取らないはずだけど、ダグラスくんがヴィツキー・ヴァレンタインの身許に重大な疑問を抱いてアイクラインの事務局に調査を要請する——なんていう事態も避けたいんだよ。アイクラインの事務局にしてもそんな要請は相手にしない。一笑に付すだろうけど、こんなことが万一アーサーの耳に入ったらたいへんだよ」

それだけでなくも自分はリーの保護者にはたいへん信用がないのだ。

「できることならその子の記憶を消してしまうのが一番安全確実なんだけど……」

「できるんですか？」

「難しいね。なぜって、ダグラスくんがどんなに頑張っても、アイクラインにいるあの子と聖トマスの転校生が同一人物だという証明は彼にはできない。

その証明ができない以上、ぼくたちは何も現実的な被害は負わないことになる」

シエラが美しい眉を曇らせる。

「実害がない限り、非常手段は使えませんか」

「そういうこと。けどねえ……そんな疑問を抱いた人がいるってこと自体がまずいんだよ」

「彼の沈黙を期待するしかないということですか」

「——黙っててくれるかな？」

シエラもルウも直接にはダグラスを知らない。

「あの子はダグラスくんのことを生真面目な性格で融通の利かない優等生だっって言ってたけど、わりと気に入ってるみたいだしね」

「それはわたしも感じました。ただ……」

「なに？」

「真面目一辺倒の人物ではないと思います。いえ、もしかしたら真面目な優等生を無理に続けた反動が表れたのかもしれませんが……」

「何のこと？」

「そのダグラスくんはあの人を慕したっているんです」

「あれま」

ルウは青い眼を丸くした。

「それ、ほんと？」

「ええ。恐らく。どうしてよりによってダグラスに会うんだ——という口調でしたから」

リイは詳しいことは言わなかったが、シエラにはぴんと来た。

それはつまり、リイもダグラスの気持ちを知っているということだ。

ルウはむしろ、何か期待する調子で呟つぶやいた。

「じゃあ、身分詐称さしやうを黙もくっていてやる代わりにつ

て、ダグラスくんはあの子に迫おったりするかな？」

応えてシエラは苦い息を吐いた。

「いっそ、そうしてくれればと心から思いますよ」

「この場合は全面的に賛成」

実際、それなら話は簡単なのだ。

リイはダグラスを半殺しの目に遭あわせるだろうし、身の安全と引き替えに他言無用を誓わせる。

それで終わる話だ。

しかし、恐らくそうはならない。

黒い天使と銀の天使は再び最初に戻って、揃そろつてため息をついた。

「面倒なことになったもんだねえ……」

「はい」

2

約束の時間から遅れること二十分、ダグラスは息せき切ってやってきた。

「すまない。講義がなかなか終わらなくて」

「いいよ。——おもしろいね、ここ」

「気に入ったかい？」

「ああ。居心地がいい」

「よかった」

笑顔になったダグラスだったが、彼はすぐにその微笑を消し、何だか硬い顔で切株に腰を下ろした。

リイは逆にくつろいだ様子で茶碗ちやわんを取った。

「このお茶もおいしい。——ダグラスは？」

「珈琲コヒを頼んできた。もうじき届くよ」

その言葉どおり、しばらくすると再び自動機械が

やってきた。

ダグラスが中から取り出したのは空っぽの茶碗に熱湯が入っていると思われるポット、香りからして挽ひき立てに違いない珈琲豆。抽出の道具一式。

それらを机の上に並べて真剣な顔で珈琲を淹いれるダグラスを見て、リイは苦笑した。

「ずいぶん徹底したセルフサービスだ」

「それもこの楽しみの一つなんだよ。豆の種類も豊富だし、その豆も注文を受けてから焙煎ばいせんして配合ばいごしてくれるんだ。道具もいろいろ揃そろっているから、慣れると自分好みの味を淹いれられるようになる」

「こっちに来たばかりだろうに、よくこんなところ知ってたな？」

「叔父が——母の弟がサフノスクを卒業してるんだ。二十年も前のことだけど、その頃からここは一部の学生の間では評判だったらしい」

「だろうな」

リイが言ったのは、この庭は二十年では利かない

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。